

町の活性化に大きく貢献！

スズキ・隼の「隼駅まつり」

- 鳥取県八頭町の若桜鉄道・隼駅に全国からスズキの隼が集う「隼駅まつり」。
- 2,000台以上ものバイクがまつりに参加して、町が大いに賑わっている。
- 地域活性化の成功事例として、学者からも注目されている。



年に一度、町の小さな無人駅を目指して、全国から2,000台以上のバイクがやってくる。この駅は、鳥取県八頭町にある若桜鉄道隼駅。集まるのは、スズキの大型スポーツ「隼」(排気量1,340cc)だ。“名前つながり”のこのバイクミーティングは、「隼駅まつり」として町に定着し、地域社会にさまざまな活力を生み出している。最近では、まつりの発生とメカニズムについて、学術的な関心も呼んでいる。

“聖地”を目指して全国の隼乗りが大集合！

隼駅まつりは、隼のユーザーが、隼駅を“聖地”と見立てて、ツーリングの目的地として全国から集まるもので、それを町が大歓迎するというイベント。毎年8月に行われ、主催は「隼駅を守る会」など地元の住民による実行委員会が務めている。

昨年8月4日に開かれたまつりは、すでに11回目を数え、過去最高の約2,300台のバイクが町に集結。まつり会場の船岡竹林公園は、イベントを楽しむライダーと地元の人たちで大いに賑わった。

北海道から沖縄まで全国各地からやってきた隼ライダーは、何はさておき隼駅に愛車をと

めて記念写真を撮るのが“お約束”。暑いさなか、地元の郵便局が駅で無料サービスするかき氷と冷えたおしぼりに、ライダーは大感激していた。

イベント会場の駐車場には車がびっしり並び、車ファンにとっては、1台1台見て飽きな



駐車場に並ぶ車の光景はまさに壮観

いものだ。同好のユーザー同士、初めて会った人とも会話が弾むし、過去に出会った“友人”との再会を楽しみに何度も参加するライダーが少なくない。アトラクションとしては、太鼓と舞などの郷土芸能、地元学生の書道パフォーマンスやダンス、婦人会による盆踊りが披露されるなど、住民が積極的にステージを盛り上げている。バイクイベントでありながら、“町の夏祭り”といった色彩が強い。来場者数は年々増加しており、単一モデルのバイクミーティングとしては国内最大級のイベントだ。



地元の演舞チームが傘鳴子踊りを披露

ブランド・コミュニティとしての研究対象

商学の学術書である『現代流通変容の諸相』（中央大学出版部・2019年9月刊）には、「地域主導型ブランド・コミュニティ —スズキ・ハヤブサと鳥取県八頭町『隼駅まつり』の展

開一」という論文が掲載されている。

筆頭執筆者は、鳥取大学地域学部で講師を務める白石秀壽さん。マーケティング論の立場から、ブランドとしてのハヤブサに注目し、ブランドを通じて形成される隼駅まつりを一つのコミュニティと捉えている。このまつりが10年以上も継続され、町に与えてきた影響について調査・研究を行っている。



鳥取大学・白石秀壽講師

白石さんは次のように説明する。「企業や製品のブランドが、学術的に注目されるようになったのは1980年代です。2000年代になるとアメリカの学者が“ブランド・コミュニティ”という概念を提唱し、以来、それに関する研究が盛んに行われています。ブランドへの強い愛着を持ったユーザー同士がつながりを持ち、コミュニティが創発されることで、企業やマーケットにどんな影響をおよぼすか、学術的にも実務的にも関心の高いテーマなのです。とくにバイクやクルマといった消費財はブランド・コミュニティを形成しやすく、多くの研究事例があります」と話す。



隼への愛着が強い仲間意識をつくる

そうしたブランド・コミュニティは、メーカーが主導するケースと、ユーザーが主導するケースに大別される。たとえば、バイクメーカーが顧客サービスとして実施するようなオーナーズイベントなどは、メーカー主導型のコミュニティ。一方、同一モデルのユーザーが自発的に集会を楽しむようなケースは、ユーザー主導型のコミュニティといえる。

白石さんは、「隼駅まつりの場合、スズキ・隼という明確な製品ブランドを核にしながら、そのコミュニティを主導しているのはバイクメーカーではなく、ユーザー団体というわけでもありません。八頭町の住民が率先してまつりを主催し、運営している点が非常にユニークなのです。私はこの形態を“地域主導型ブランド・コミュニティ”と呼んでいます。学術的にはほかに報告が見当たらない貴重なケースです」と話す。



地域主導のブランド・コミュニティ
地元の子供たちも積極的に参加している

隼駅まつりは“駅を守るため”の思いから

地域主導の隼駅まつりは、どのようにして始まったのか。まつりを立ち上げた「隼駅を守る会」の西村昭二さん（75歳）は、2007～08年当時を振り返る。「はじめは、なんで隼駅にだけバイクがよく来るんだろうと、不思議に思っていました。ちょうど、地域の過疎化が進



隼駅を守る会・西村昭二会長

んで若桜鉄道の廃止が囁かれていたころです」。すると 2008 年 8 月に、ある二輪専門誌が「隼駅に隼で集まろう！」という記事を書き、それが西村さんにも伝わった。隼駅にバイクがやってくるナゾが解け、「こんな無人駅でもたくさん人が来てくれるならいい話です。なんとか駅を賑わせたい。地元の約 200 世帯に声をかけて、2009 年 3 月に隼駅を守る会を立ち上げました。駅を目指してやってくるライダーに、何かおもてなしをしたいという意見がまとまって、それが隼駅まつりという形になっていったのです」と話す。

守る会では駅をきれいに整備して、スズキに協力を求めて隼の特大大ポスターを駅舎に掲出するなど、ライダーの受け入れ体制を整えた。2009 年 8 月、第 1 回の隼駅まつりを開催。やってきたライダーに、冷やしたスイカを切ってふるまう農家の人もいた。町の歓迎に心を打たれたライダーは再訪を誓い、まつりは年々充実していったのだった。

隼駅まつりは町に活気を生んでいる

隼駅まつりは、町の地域振興策にも好影響を与えている。八頭町役場で、隼駅まつり実行委員会事務局を務める保木本幸雄さんは、「観光資源の少ない八頭町ですが、隼のライダーがたくさん来る町として全国に知られるようになって、大きな宣伝効果があります。このまつりの勢いと、地方創生の機運の高まりで、町は活性化しています。たとえば廃校を再生した『隼 Lab.』は、市民の憩いの場であり、IT 関係者やイノベーターが集うワークスペースです。これもメディアや起業家からたいへん注目されています。まつりの実績が土台となって、こうしたチャレンジが成功しているのだと思います」と話す。



八頭町企画課・保木本幸雄さん

以前は何もなかった隼駅のすぐ前には、地元の若者や観光客に人気のカフェレストラン「HOME 8823」ができた。少し離れた場所には古民家を改造して、気軽に宿泊できるドミトリ「BASE 8823」がオープン。ここはライダー“ご用達”の宿泊施設となっている。

これらのレストランと宿は、いったん東京に出て U ターンしてきた地元の若手が 3 人で共

同経営している。「BASE 8823」を担当している山田 景さん（33 歳）は、「宿泊するライダーのために、バイクの駐車をライトアップして、中庭でバーベキューをしながら眺められるように工夫しています。洗車スペースを用意したり、工具を貸し出したり、ライダーにとって居心地がよく、便利に感じてもらえるサービスを心がけています。隼駅まつりの日が近づくとだんだんソワソワしてきて、頑張るぞという気持ちになりますね」とのことだ。



古民家を改装した BASE 8823・山田さん

隼駅まつりはなぜ成功しているか？

町の PR や地域の活性化に役立っているとはいえ、バイクにさほど関心のなかった町の人たちが、10 年以上に渡ってライダーを受け入れ続けている要因とは何か。

鳥取大学の白石さんは、一つの結論を述べている。「それは、隼に乗って町にやってくるライダーのモラルが、きわめて高いということです。地元の人たちを気遣って、乱暴な運転をしたり夜遅くまで騒いだりといったことをけっしてしません。多くの人がライダーのマナーのよさを指摘しています。これもブランド・コミュニティの効果の一つで、隼の名を汚す



有志のライダーが安全とマナーを呼びかけ

ようなことはできないという、ライダーの矜持（プライド）がそうさせているのだと思います」と話す。

実行委員会のメンバーには地元の関係者のほかにも、県外を含めた有志のライダーで構成する「隼駅を守る会・交通安全部」がある。地元の警察と連携して、まつりの前日から、訪れるライダーに安全運転を呼びかけ、駐車誘導案内、交通整理を行うなど、イベントを陰で支えている。そうした活動があることも、町がライダーを受け入れ、まつりを継続していく大きな力になっているようだ。

今年は新型コロナウイルスの影響で、残念ながら開催を断念したが、実行委員会は、「今年の分も含めて来年は盛大に開催したい」と表明している。晴れて2021年8月の隼駅まつりを楽しみに待ちたい。



人とバイクで描いた「隼」の絵文字。
2021年8月の開催実現を大いに期待したい！

JAMA「Motorcycle Information」2020年8月号／特集より